第３回『戦争体験談語り継ぎ部養成講座』　安富　清　氏（H25.12.24）

～戦時中、栄養失調やマラリアに罹患した仲間を助ける使命感で過ごした体験を中心に～

わしは、もとは千葉県の有名な工兵隊に所属しとった。その後そこから分かれて折り畳み舟の訓練舟を満州へ曳いていった。上海で工兵の教育を一期終了したら、一等兵になった。

ちょうど5月6月ごろになったら暖かくなるから、北方も氷が溶けて川が使えるようになる。北のハルピンは広いとこやから、撥水のテントで皆そこで寝起きして演習をした。

わしは工兵やから、エンジンの修理をせないかん。隊には3人に一台ずつ舟があるねんな。うちの中隊だけでも30台ぐらいの修理が必要やった。わしはエンジンの勉強をそこでさせてもろて、その後関東軍の大演習に参加させてもろた。

その演習が終わったらじきに9月や。9月になったら冷えて、気温はマイナス25度にまで下がって、だんだん氷が張ってきた。それでそこでは演習ができなくなった。それで満州から大陸を下がって南京の揚子江で演習して、そこでもわしはずっとエンジンの修理ばかりに行きよった。

気温が暖かくなったらまた満州へ帰って、そこで大演習があった。その時の司令官は梨本宮殿下やった。野外演習をやって、ハルピンまで帰ってきた。

そこへ南島行きの動員命令が下った。工兵の荷物は多く、その荷物を船やトラックに乗せるのに10日ほどかかった。

それから大陸を南にずっと下がって、そのあと釜山に行ってその後、4日ほどおったかな。そこに、本願寺という寺があって、そのお寺に泊めてもろた。3日ほどそこにおって、そこから5，500人が乗る大きな護衛船に乗って西南部へ行った。それでずっと南に下って、九州まで帰ってきた。でもそこでは上陸できへん。5隻の船団を組んで、ただ乗っとるだけ。これが日本の見おさめかと思ったな。

それから台湾の高雄にちょっと寄った。一晩泊っただけや。

それからマニラに行って、マニラで4、5日おったかな。そこを出てセブ島で、うちの隊からは自分と仲間3人が電気工事の教育を受けた。今度は60馬力のディーゼルの船エンジンの勉強を教えてくれた。昔の高等学校の教員が3～4人来られて、各エンジンとか電気系統とかいろんな教育を受けた。その時は、あっちやこっちの部隊から人が来て、全部で200人位おったかな。

結局、そこで2ヶ月間勉強して、最後に試験があってな。わし以外のもんは、大学ノートにざーっといっぱい、いっぱい勉強したことを書いとんねん。自分らはそんなに書いとらへん。

「それどないすんの？」と聞いたら

「帰ったら隊長に報告せなあかんねん」と言うやないか。自分は一つも書いとらへん。「こらあかん」思って、大学ノートのページに2，3枚書いて、それで試験に行った。そしたら自分は覚えがいいのか、今まで教えてもろたことばっかり出た。とりあえず答案を書いて出した。

答案は出したけども、自分のとこには成績の報告はなかった。とにかく「ああ終わった。さあ帰ろ」言うて、本隊がおるミンダナオ島へ帰った。

そうしたら本隊の方に成績が来とんねんな。

上官が「おお、お前ようやった！」ってすごく言うから、なにがようやったんかと思たら、「お前210人の中で3番目やった。ようやってくれた！」って、まあ喜んでもろて。その時にすぐ、わしは「機関士」の名前をもろたらしい。

そこでうちの部隊の者40名を集めて、2週間自分が覚えてきたことを教えた。
上官は、「これから教えることを書いておいてくれ」と言われて、書いたもんをざーっと読んどいて、「あとは頼むぞ」と言って、ぷいとおらんようになった。そんな具合で、一人で教えた。
それが終わっても、また出発するまで一週間ほど間があった。
「この間がもったいないさけん、今から炊事場行って、炊事の稽古してこい。どこで、また何せんなんか分かれへんから」そう言うてくれる人がおって。もうその人は仏さん、神さん、生け神さん。わしを膝元においとるように、弟みたいに「これも覚えとかないかん」「あれも覚えとかないかん」いうてわしを使てくれてねんな。でも炊事場におるのはみな、料理屋やらそんなとこ、行った奴ばっかりやったから上手やろ。わしは一週間ではなかなか覚えられへんかった。
それからずうっと南部、インドネシアに行った。インドネシアのハルマヘラ島ワシレ村、そこに借物所があるねんな。食糧やら、衣類やら、兵器をいっぱい積み上げた山が3つも4つもある。ハルマヘラに１駅2万人くらい兵隊がおって、その人らの食糧なんかをためとるんや。で、どんどん貨物が入ってくるんや。で、その荷降ろしを夜中に手伝いよってんな。昼間は、魚雷に遭うかも分かれへんから、夜中に一斉に貨物船がやってくる。で、その船は半分ほど荷を下ろしたら、帰ってしまうんや。５日ほど手伝うたかな。

それから、大発動艇が5隻あって、「それに歩兵30人ずつ乗せて、魚雷艇の基地を探してこい」と命令が出た。インドネシアには2，000以上、点々と島がようけあるんやわ。そういう島の魚雷艇の基地を探るんやけど、そんなん探して、もしあったらこっちは玉砕や。そんな、敵軍みたいなあんな、ええ銃あらへんし。こっちの持っとる鉄砲ボンボン撃ったって、敵はそんなもんこたえへん。そやけん、ぜんぜん魚雷艇の基地が見つからなくてよかった。

帰ってから、次はメナドへ行った。メナドはええ町やったで。メナドに3日ほどおったかな。帰ろうとすると、わりと大きな船ねんけど、エンジンがかからず船が動けへん。漁船が「引っ張って帰ったろ」言うてくれて、引っ張って連れて帰ってもろた。
そうして夜中に、わしらが借物所に帰ったら、爆撃でもうなんにもない。もうほんまに、どこに何があったかも、わからへん。食べもんも、何にもない。やられて、本隊がどこにおるのかも分かれへん。
そこに新船があってんな。日本の漁船や思うねん。で、それに乗ってあっち行きこっち行き、しょったら、しまいに、本隊がおる場所が分かって、そこへ行ったら、「もうおまえら帰って来んと思って、どこへ行くのか何も言わんかった」と言われた。携帯電話もあれへん時代やろ。
それでまあなんとか本隊を見つけたわけやけど、荷物をどんどんどんどん片付けよんねんな。「どないすんねん」言うたら、「いまからガレラ行くんや。その荷物をこしらえよるんや」と言う。それを手伝って、2隻の船に荷物を載せて出かけたら、出航準備の様子を誰か敵が見とったんや思うねん。向こうに魚雷艇が待っとんねんやな。「ほっ」と前見たらな、黒いもんが2隻あんねんや。「あっ、これはやられるな」と思った。
敵の魚雷はものすごいスピードや。それはもう日本の魚雷っちゅうもんやない。日本の魚雷は9ノットから、最高出しても12～3ノットしか出えへんのや。向こうは、34～5出んのや。うちも2隻、向こうも2隻や。海上でくるくるくるくる回って、敵に焼準を合わせようと思ったら、敵がダァっと打ってきたと思ったら、また次のやつが来るんや。爆撃の破片が身体に当たったり、顔をかすったりした。まともに破片が当たったら痛かった。
そうしているうちに1隻の船は、なんとか逃げて向こう側の島へ行ったらしいねん。わしらは「もうついでや、向こうに衝突したれ」いうて敵にぶつかろうとしたんやけど、敵はそんなことさせるかいな。つうっと消えてまう。

そんなんで、「もうしゃあない。もう帰ろ」いうて、岸につけたんや。そんなら船が銃弾にあって蜂の巣のようになっとる。それでも、不思議に誰も戦死者はなかった。
それで、もうしゃあないさけんに、その船ほかして、皆持つだけ持って、歩いてガレラまで行った。朝も昼もない。昼間は歩きよったら危ないさけん、宵の口から歩いて、10日かかってガレラに着いた。

それで向こうの歩兵の部隊に配属になった。
でもそうして行ったって、寝るとこもあらへん。なんか建てよるもんなら、いっぺんに敵にやられてしまう。
そこで山の斜面を削って穴掘って、そこに住んだんや。うちは、工兵やったからな。うちの部隊はそれに住んだんやけど、スコールが一日に1回は必ず来るやろ。ダァっと、もう前も見えへんぐらいに降るんや。それで、20分ほどたったらばっと止むんや。それで穴の中が湿気てしもて、口あけて寝とったら口の中にいっぱい土が入ってきて、目が覚めたら土をくわえとるんやな。そんな生活やった。

それから食べるもんはだんだんだんだん、無くなって。
あるとき、その歩兵部隊で命令があってな。戦車が来たら、それを止められるように戦車壕の穴を掘ってくれいうて言われた。そんな大きな戦車が入る穴を掘るなんてかなわんけど、結局沿岸に30ほど掘ったかな。
穴を掘ったり肉体労働が多かったけど、飯がぜんぜん食べられへん。いうか、食べ物があれへんねんな。朝ちょびっと、わけのわからんような汁を出してくれるだけや。で、昼もなんやちょびっと。昨夜から腹減っとんのに。
もう腹が減ってもてな。ヤシの実があんねんけんど、それを採りに登れる者も居るねんけど、登りよったら他の皆がなんぼでも「登れ」言うから、「わしは登れへん」「わしも登れへん」いうて、みんな断ってまうねん。そやから、結局ヤシも食べられへん。なんにも食べるもんがあらへんかった。しまいに、ある者がスコップ一本でヤシの木を切ろうとしよるねんな。ヤシの実がたくさんなっとる木を切って折るんやから、大変なんや。そしたら木を切っとる者が泣いてなぁ、涙をだぁっとこぼしよるねんな。ほんまに可哀そうやったで。
帰る時は空中を歩きよるようなもんや。もう、ふらふらや。帰ったって、食べるもんいうたって、これっちゅうような物あらへん。それに晩になったらな、本来一膳ぐらいは多く要るもんやけど、ほんまにええ加減なもんやった。そんな物でも、そのときの歩兵の部隊からもらうねんでなぁ。向こうもそら、何もなかったやろう思うねん。

戦車壕作りが終わって、今度は何か食べるもん植えなしゃあない。そんで昼間外に行きよったら危ないから、夜中に林の中に開墾して。でも植えたって、3カ月ほど先にならないと食べられへんけどな。
そうこうしよる間に「司令部に行って、これとこれとこれ貰うてってくれ」言われて、船に3人が乗った。行く時はええねん。けど、帰りは、米やらなんやら一つの船に60キロほどのやつを20俵ほど積みよった。
それを積んで帰りよったら、ちょうど一緒に行っとった者が「乗せてくれ」言うて。どこの人や知らんけど、部隊の会計の者やった。その人乗せて帰りよったら、その人はわけのわからんところで降りるから、その日はそこで寝なしゃあない。で、米の俵を開けてちょびっとずつ取ってな、朝飯炊いたんや。それを、対岸から見とったらしいんや。その後、米を盗みよったんや。
ところがなぁ、わしは「みんなこんなにも何にも食べんとおったんや。いつもこんなに食われへんねや。せやけん、みんなにいっぺん、腹いっぱいに食わしたろ。食わんことには、こっちもかなわんさけんに」と思って皆に食べさせた。
そない言うたら、その人が「あのな、帰ったらな、わしのとこに、『何が欲しい』いうて、書いてもって来い」

言うた。
　それで帰ってきて早速「タバコが吸いたいから、タバコをください」いうて書いて、部下に持っていかした。そうしたら持って帰ってきたのが、1箱20本入りの小箱がなんぼ入っとんのんか知らんけど、その大箱を2箱持って来たんや。それで皆にも分けてやったら、えらい評判になってなぁ。
　ええ人もおるんやで。腹の中ではこうして、兵隊をかわいがりよるいうことねや。その人も所属の隊を一等兵からずうっと上がってきてな、勉強して大尉にまで上がっとってんや。あれはかなり年がいっとってや。40からという歳やった。そんな人も居ったったんや。
　そんなことを5回ほどやったな。50日や。それでもう交代した。

　ミンダナオにおったときは、こんどは開墾で作った食料がもう大方収穫時を迎えとって「あぁ食べられるようになったなぁ。さぁ、サトイモ掘ろか。もう時期が来たんや」と思ったときには、もう終戦間近やった。
　その頃、中隊の上官が「遣いに本部まで行ってくれ」言うから、二人が上にあがっていったんや。
　そしたら、斜面と山のすそに背丈の高い何かがいっぱい生えとった。
「ほっ」と前見たら、大きなニシキヘビが頭上げて、だあっと追いかけてくる。それが、大きいニシキヘビでな、5メートルほどあった。それが追いかけてきて。あんなもんに捕まえられたらいっぺんにやられてしまうで。二人は「そら、腰が抜けてしまうほど、恐ろしかった」言うとった。
　逃げて、軍の倉庫の中に飛び込んで、大きな声で、「助けてくれ、助けてくれ」いうて、事情を説明したら、そこにおった人が近所の壕の中から銃もってきて10発撃ったんや。それでそれを殺してもたんや。それからその蛇をどこかへ持って行った。その時はわからへんかったんやが、炊事班に持って行って、そこでその蛇を料理しとんねん。
　その明けの日、朝食に汁が出て「今日の汁はうまいな。肉が入っとる」いうてな、食べたんや。
で、他の者が「それは何の肉か知っとるか？昨日ニシキヘビ捕ってな、その肉や」って言うんや。
「えぇー？えぇー？」いうて、食べてんけどな。でもうまかった。
　あの蛇一匹分をめくった皮を広い板に2回張って、それでもまだ、半分ほど余ったから、5メートルほどあったんやな。そら、大きな、立派な蛇やった。
　そんなこともあった。

　それから少しして、終戦になった。けどなぁ、終戦になっても、その前にもう、なんにも着るもんもなけりゃ、履く靴もない。湿気でみんな腐って、瘴（しょう）が出て、服や靴もみんな腐ってもた。「これを着よう」思たって、シャツなんか、ぼろぼろぼろぼろ。袖なんかが取れてしまうねんでなぁ。そやから、もうみんな裸やった。それから、裸足。裸足のほうが軽いさけん、もう裸足が慣れてもて、他の物がもう履かれへんのや。器用な者は、繊維とって草履作ったりもしよったけどなぁ。でもあんなもん、硬くて痛いわな。板みたいな物で、つっかけこしらえたりもして、それに裸足。裸足に褌一つやで。
　あの格好してた頃は終戦の1～2カ月前やったんやろうな。

　栄養失調でなぁ、ほんまに皆、骨と皮だけになってもてなぁ。
　帽子は被っとったけど。それで、スコップだけ担いで外に行きよんねんな。あれ見とったらほんまにかわいそうで。
　わしは今はもう、90そこらのおじいさんやけどな、その当時は皆若いのにもう腰かがめてもてな、皮とほんまに骨だけ。それでも、あないして生きとった。せやから、そんな者のためになんとか外へ出ていって、何か食べ物探してきたろ思って、探しに行きよった。大勢連れとったら危ないから2，3人連れて。それはほんま

に哀れで。

　人が次から次から死んでいった。わしらの曹長やった人が、死んだ人の遺骨をとるのに、わしにいっつも「行ってくれ」と言うた。
　あるとき、マラリアにかかって三人ほど死んだんかな。それを火葬するのに、夜中に穴掘って、夜中に火つけんねんけどな。そこらへんの枯れた木を探してきて、山みたいに積んで。そこに遺体を寝かして、その上にまた枯れ木を積み積みして、それでガソリンをばぁっとかけて火つけて、骨がとれるまで、朝までずっと二人で焼きよった。2回か3回ほどやったかな、分けて焼くねんな。いっぺんに焼こうとしても、なかなか焼けへんもんやで。ただ見とったらあかんねや。ずうっとガソリンを注いでいかなあかんねや。ガソリンを注ぎ続けて焼かな、みんなきれいに燃えへんねんな。それで朝、中隊のものがみんな出てきてから、骨を拾って持って帰ったんや。
　もうひとつ別の話は、「野戦病院で亡くなった」いうことで、また「おまえ行ってこい」言われて、わしが亡くなった人の遺体をもらいに行ったら、病院長が「これ、もう土葬にしょう」いうて。
　で、山ん中に穴掘って、それでそこに、毛布やらをかけてな。
　穴を掘りよる間に、腹が減って減って。何も食べてないのに、穴掘ったもんやさけん、ほんまにもう死ぬぐらいしんどかった。
　そこへ現地人が通りかかって
「おい、何か食え。何が欲しい？」と言うたんで
「バナナの炊いたやつ、いや、揚げたやつくれ」と言うた。そしたら
「持って来てやるから、何かと交換しよう。褌（ふんどし）がいい。褌は一つしかないの？」と言うから、
「汚れた褌やったらある」と。向こうも物が無いねんな。
　まあそれで、褌とバナナを交換したんや。一部分だけちょっと残しといてそれを食べて、褌なしにズボンだけ短いやつ履いて。
　それでそこの部員が「これを持って帰ってやってくれ」いうて遺体の一部を切ってくれて。それを背中に負うて持って帰ってきて、一晩かかって骨にしたんや。

　ほんまに、あの曹長は「行って来い、行って来い」言うから、ほんまになあ。「お前は役に立つから」という思いで言うてくれたんやから嫌とは言われへんし。あの人も死んでしもたけど、思えばほんまによう助けてもろた。
　その頃の戦闘は皆「わしに行かしてくれ」いうて志願して、挙句にあっちで玉砕、こっちで玉砕、そんなんばっかりや。
「そこへわしも行かしてくれ」いうて、頼んでも、
「あかん。おまえはここにおらなあかん。おれ」いうて、絶対行かしてくれへんかった。「お前はなんでも役に立つさかいに」いうて。

　それからな、終戦になった。
　終戦になってからのほうがよけいにきつかった。
　終戦になって少ししたら、「お前らは出て行け」いうて、連合軍が言うてきたんや。「ここはもう現地人、インドネシアの人に渡すさけんに、余所へ行け」いうことやった。
　せっかく食べられるようになったのに、殺生なことやと思ったな。
　しゃあない、そんなもん、しゃあない。負けとんねやからな。

それで、また一からや。また、三か月ほど、なんにも食べんと居らなあかん。ほんまにそれはえらかった。
あんなころの写真もなけりゃ、映画やら、そんな記録は全然あらへん。哀れで見られへん。親にしてみたら、そんなもん見ておられへんわな。
ほんまに哀れや。死にかたも。ほんまになんにもあらへん。褌一つ無い。
わしが「もう褌があらへんねん」言うたら、仲間が「ほんまか、そらしゃあないの。わしが探してくる」言うて、沈んだ船の中から旗を取ってきて、その旗を切り分けて「褌にせい」言うねん。旗は、あの布は麻やから痛いねや。それ付けたら、真っ赤になってもて。でもそれしかあれへんもん。
着るものも褌だけしかあらへん。哀れなもんやで。ほんま。
まあなんせ、ようほんまに、よう生き残った。
わしら中隊は、250～260人おったのが、30人ほどになってしもた。ところが、あっちやこっちから残った人をうちの中隊に集めて「50人くらいに、せえ」いうて上から言われた。兵隊は来るねんけんど、よその者が来たってなぁ、ほんまに。

いっぺんモロタイ島に行った。そこでうちの中隊の者だけで50、60人死んでしもとる。逆上陸したときやられたんや。
わしらが到着してしばらくしてから、隠れていた仲間が7、8人出てきて、「病気で仲間が待っとるさけん、そこまで一緒に来てくれ」いうて、それで真っ暗闇の中を船を漕いで、行ったんや。
その男ら、みんな一緒に今まで働いとった者ばっかりや。そやからもう、帰りに泣いて泣いて。ムシが知らせとったんか「もう、これはあかん」いうて。ほんまにあないに泣いたん知らんわ。その人ら、一人も戻って来いひん。もう、そんな体験がいっつも頭に残っとる。

同じ戦地に来とった人に、北条の人がおったってびっくりしたんや。その人はニューギニアに行って、魚雷にやられたんや。どうやって行かれたか知らんけど、ハルマヘラ島に着いとってねんな。それが、わしの中隊がおった駐屯地やったらしいねん。その時は全然知らんかってんけど、戦後、わしが役員をしとった会を北条衆に交代するのに、その人がおったんや。で、話しよったら同じとこに行っとられたいうことが分かってん。
それやったら、ずうっとハルマヘラ島に居ったらよかった。わしはその人が来る一年ほど前から、そこへ入っとるさけん、その人が来るころには上がったけど。そんな広いとこなぁ、知り合いがおっても分かれへんわな。ハルマヘラ島いうたら、淡路島くらいの大きさやねんな。

もう一人出会ったのはな、わしの同級生で富合の別府の男や。軍曹やった。
わしが魚雷にやられたときに、本部に報告しよう思うて、電話探しよってんな。そしたら
「そこに電話ある」いうて、聞こえた言葉が播州弁やんか。「ありゃ」思てな、「あんたら、出身はどこや」いうて訊いたら、
「加東や」「神崎郡や」とか言うやんか。
「加西の者、おれへんか？」いうて訊いたら、
「おってやで。○○軍曹や」
そんで、軍曹が出てきて、
「これ炊いてやれ、タバコ出してやれ」言うてな、食べさしてくれてな、ほんまにありがたかった。
わしが日本に帰ってきたその晩、その家の奥さんがうちに来られたんや。どこで聞いたんか知らんけど。
「うちの子は？」いうて聞かれたから、

「いや、もう、帰ってこられるでしょう」いうて。
　そしたらほんまに帰って来たんや。昼ごろに。後の組やってなぁ。

（山本先生：この年代の人は、一番えらい目に遭うとってです。戦時中ね。もうちょうど、徴兵検査も甲種やったしね。甲種の人は必ず兵隊にいかないといけないし。甲種、乙種、丙種、丁種。甲種合格者は、必ず兵隊の中にいれられる。だいたい身長が、1メートル60、最低が55かくらいですね。一番精鋭部隊。）

　歩兵行ってすぐに喧嘩があってん。「これは歩兵の華やさけん」とか、えらいうまいこと言うて。相手は何が何でも一番やと思いたいねん。あのぐらい殴られたん、ほんま知らんわ。
　それで、わしがそいつに「あんたどこの出身やいな」いうて訊いても全然言えへんわ。そら、言われへんわな。日本に帰った時にどこで会うか分かれへんから。会ったら何されるか分かれへんから。ちょっとも言えへんかった。
　軍隊というところは、絶対服従でね。

（山本先生：上官の言うことはどんなことでも、「そうです」言うて、「カラスが白いです」言うても「そうです」言うくらい。言い訳は絶対に通らない。しかも、要領が悪いとひどいめに遭わされる。軍隊の中でも、要領が悪い者が一番かわいそうです。今の社会も一緒でね、要領よく渡るということがね、軍隊の秘訣。）

　当時は銃剣道の銃剣術をよくやっていたやろ。自分が使っとった銃剣をそのまま歩兵隊に持っていったんや。それで銃剣術の練習をする。銃剣術の練習の時にな、ダァっと打ったら剣先がポッと跳ね上がんねや。相手はそら怒ってな、あれがもうきっかけやった。「このガキほんま」いうて、よう喧嘩になった。

（山本先生：当時は確か兵隊というものは、着るもん全部、国から支給されるんですね。靴下ひとつでも数が決まってますんでね、洗って洗濯したあと、盗まれて、数が足りなくなって殴られて･･･だから、盗られないように、狙われないように、注意せんと。褌1本でも、国から支給されるのでね。
　将校以上、士官以上はね、自分で買うことができるんです。）

その代わりごっつい給料もらいよる。

（山本先生：確か兵隊は、全部官給。ただ、専属の人に取られる。靴下にね、墨で名前書いたりするんですけど盗られる。そらもう大変ですよ。）

よう、工兵に行って…。

（山本先生：安富さん、工兵ですか。工兵というのは、橋を作ったりね、道路構築したり？）

　工兵は橋を作ったりな、やぐらを組んだりな。工兵は技術屋やから。それでな、わりとわしは成績もよかったんや。有能でな。
　去年の旧軍人の集まりには兵庫県の上の者が4．5人おったんや。その人らがいっつもわしのとこに来てくれんねや。わしは全然知らん人やねんやけどな、「あんたは成績良かったから」いうて、えらい言うてきてくれる。同じ土地から戦争に行った者の成績が良かったら、皆喜ぶねや。向こうは関東軍が多いんや。東京

や横浜や、千葉県の者が多いやろ。それで関西の者が上へ行ったら関東の者が妬むんやな。妬んででどうするんか分かれへんけど。

（山本先生：このあたりの、播州の兵隊もわりと強かったんやね。中国大陸では、姫路の師団の兵隊も強かったんです。青野原の演習場で、よく訓練してますんでね。平地で戦争をやらしたら、姫路の師団の兵隊は非常に強かった。一番弱かったのは、大阪の８連隊ですね。あの8連隊は、必ず負けよったですからね。大阪の兵隊はね、商売は上手やけど、兵隊は弱かった）
（山本先生：安富さんはね、生きて帰られるとは、相当な生命力があったのですね。大変な目に遭われてますね。）

　復員船が目の前まで来て、あと三日したら出て行くいうときに、熱が42度から下がれへんかった。そのときに衛生兵が持ってきた注射液を10本いっぺんに打ったんや。
「毎日1本ずつ打っても、残ってしまうで。皆と一緒に帰れるんやったら、もう死んでもかめへん。これみんな打て」いうて衛生兵に言うた。
「これな、いっぺんには打たれへん薬やねん。死んだら知らんで」って衛生兵はばぁっと逃げていったんやけど、1時間あまりしたら、すうっと平熱になってきた。そういう不思議なこともあった。
　熱帯で熱いうたら一番たちが悪いんや。頭がやられてまうねんや。
　せやから、わしはもう何べんも戦争で死んどんねんけどなぁ。それが今、生きとるいうことは、わしは死なれへんねんな。

（山本先生：安富さん、今のお歳は90？92？）

　92。93にかかりよんねや。まあなんぼでもな、生きられたらええねん。
　明治、昭和は一番ええ時やった。そんなええ時に、皆殺してもて。なんであんなになぁ、死ぬとわかっとって大本営が「行け」いうて。何を考えとるんやろ。もうその頃にはなんにもあれへんねんでな。兵器もなけりゃ、食べ物もない。そんなもん、みんなやられてまうのに。おのれらな、じいっと東京におってな、ようさん金もろてな。何を思とんねやろな。
　「大和」（大和型戦艦）や「出雲」（装甲巡洋艦）いうて、あんな大きなもん造らんでもええねや。あんなもん造るぐらいやったら、飛行機ようさん造っとる方がええねや。

（山本先生：戦艦大和いうのはね、長さが250メートルあったんです。幅が23メートル。それは大きな船でした。魚雷が大方50発命中して、普通は軍艦いうたら、うまく命中したら一発で沈むんですけれども、50何発受けても、沈まなかった。それぐらい、戦艦大和は、ものすごく大きな船でしたね。えー、で、安富さん、軍人恩給受けられてるんですか？）

うん。

（山本先生：そらあ、もらわなねえ。）

　戦地におったらな、時計もなけりゃ、カレンダーもあれへんし、四季はあれへんし。せやけん、何年経ったんか、何月やら、全然わかれへん。

（山本先生：それだけ苦労してらっしゃるいうのはね、素晴らしいことです。）
（受講生：そういうふうにして、やってこられたおかげで、われわれが、今、この時代に生きとれる、いうことですね。）
（山本先生：昔はもう徴兵検査が20歳であって、3年か4年か、兵隊に行って。それ帰って来てから、いわゆる普通の生活ができる。）

　帰ってきたらな、先に戻ってった人に「お前らが戦争に行くから負けたんや」いうて言われたんや。
　わしはな、区長のとこへ挨拶に行った。ほんだら、
「お前、ええもん、貰てったんか？」あほか。何考えとんねやろ。
　で、役場へ行ったら、
「あんたはもう居れへんなっとるで。あんたが戻ってったら、幽霊が戻ってったようなものや。」

（山本先生：まあ普通は生きて帰って来れないからですね。思う存分、長生きしてもらって。）

いや…「長生きしよう」思うというたって。なかなかあの世に連れて行ってくれんねや。

（山本先生：ずうっと居ったったらよろしいねん。急がんでよろしいねん。戦争の分だけ生きたったら。）